

# 社会人基礎力は

どこでも生きていく②

「生きる力」／キャリア発達に関わる諸能力／社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力／人間力／キーコンピテンシー

## 小・中・高・大と全ての教育段階で社会人基礎力を育てるために

教育にはその対象や環境によって、それぞれ目指す目的があります。初中等教育（幼稚園～高校）であればその根本は、人として社会で生活するとはどのようなことを知ることによってよいでしょう。また近年、いろいろな年齢段階で必要性が指摘されているキャリア教育では、「勤労観・職業観と、働くに当たって必要となる知識・資質・能力」を育てることが大きな目的です。そしてそれぞれの教育の場面で何を育成の目標とするかを示すために、「生きる力」／キャリア発達に関わる諸能力（例）などの能力のフレームが提示されています。

「社会人基礎力」は、それらの能力のフレームの中で十分生かせるものです。なぜなら教育は先に述べたように、いずれも将来社会人として生活することが意識されているからです。

ここでは各能力フレームの中で、「社会人基礎力」がどのように位置付けられるかを紹介します。そのポイントは、「社会人基礎力」は既にそれらの中に組み込まれているということです。それを意識するだけでも、それぞれの教育の効果がより高まると同時に、「社会人基礎力」の育成も、おのずと活性化すると考えます。

### 「生きる力」

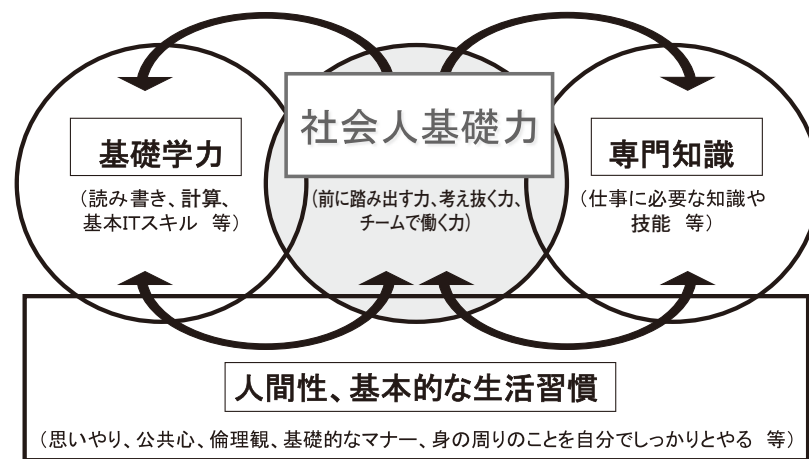
#### 「初中等教育の基本的な考え方は「知・徳・体」

#### 初中等教育で推進されている「生きる力」

教育を考えると、まず思い浮かぶのが初中等教育（小中高校）の世界ですが、そこに非常に大きく関わっているのが、「生きる力」です。これは平成8年の第15期中央教育審議会で示され、その後、ゆとり教育の推進など、初中等教育の教育改革に影響を与えた能力観であり、今なお学習指導要領の基本となる考え方です。「総合的な学習の時間」や、各教科の評価を相対評価から絶対評価に変え4つの観点で生徒評価を行うことにも反映された考え方です。「生きる力」という概念が示されたことによって、「知・徳・体」がそれぞれ育成され、その上で個別知識だけでなく、学力や資質などを包含した「生きる力」が大事になっている、ということが確認されました。

能力の全体像

## 職場や地域で活躍する上で必要となる力



## 「生きる力」の「確かな学力」と、「豊かな心」をつなぐ部分への着目

「社会人基礎力」と「生きる力」(\*)の関係

○点線で囲んだ部分を「社会人基礎力」と位置付けた

**知 =** 基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自らの課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力

**徳 =** 自らを律しつつ、他人と共に協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性

**体 =** たくましく生きるための健康や体力

※文部科学省(中央教育審議会)

「社会人基礎力」は、この「生きる力」との関係においてこそ、最も明確にその位置付けを持っていると言えます。それは、「生きる力」と「社会人基礎力」は、近い目線で人間を見ていると考えられるからです。右図で言えば「知」の部分に、「職場や地域で活躍する上で必要となる力」で言うところの「専門知識・基礎学力」が含まれ、「徳」の部分が「人間性・基本的な生活習慣」となります。「社会人基礎力」は、「生きる力」の中で独立して表現されている「知」

に関する「豊かな学力」と、「徳」に関する「豊かな心」をつなげつつ、横断している領域であると言えます。別の言い方をすれば、「豊かな学力」と「豊かな心」を分

けて考えることで見落としがちな、学力や能力・資質に注目し言語化しているのが「社会人基礎力」なのです。

具体的には、「社会人基礎力」は「前に踏み出す力」を立てることで、「主体性」や意欲を確認しました。また「チームで働く力」は、「知」と「徳」が共に関わり、補い合って支えられる力であることを示しました。

したがって、「生きる力」の育成を図る中等教育では、「社会人基礎力」は、通知表に表れる「知」の領域を主に表す、科学学習の「4つの観点」（「知識・理解」「技能」「思考・判断・表現」「関心・意欲・態度」と「徳」の領域を主に表す行動面の「10

小学校、中学校、高校教育の各教科で行われている「評価の4観点」の例

| 教科  | 観 点                           | 評価の4観点   | 1 観点別学習状況 |   |   |    |
|-----|-------------------------------|----------|-----------|---|---|----|
|     |                               |          | 1         | 2 | 3 | 学年 |
| 数 学 | 数学を学ぶことに興味があり、意欲的に課題に取り組む。    | 関心・意欲・態度 |           |   |   |    |
|     | 学んだことを生かし、多様な考察をする。           | 思考・判断    |           |   |   |    |
|     | 数学的な表現、処理の仕方を身につける。           | 技能・表現    |           |   |   |    |
|     | 数量、図形についての知識を身につけ理解する。        | 知識・理解    |           |   |   |    |
| 理 科 | 自然現象や物事に関心を持ち意欲的に調べる。         | 関心・意欲・態度 |           |   |   |    |
|     | 自ら問題を見だし問題を解決しようとする。          | 思考・判断    |           |   |   |    |
|     | 観察・実験を適切に行い、その過程や結果を適切に表現する。  | 技能・表現    |           |   |   |    |
|     | 自然現象や物事の原理・原則について知識を身につけ理解する。 | 知識・理解    |           |   |   |    |

平成10年の学習指導要領の改訂に基づく。平成22年の新たな改訂では、「知識・理解」及び「技能」、「思考・判断・表現」、「関心・意欲・態度」において評価を行うとされた

の項目」（「自主・自律」「創意工夫」「思いやり・協力」など）として、ほぼ教育されていると言えます。しかし、それらを個別の教科や学校内の活動、さらにそれ以外の活動と分けることなく、どの場面でも意識して育成しようとするのが、「社会人基礎力」なのです。

「生きる力」を踏まえた科学学習に、社会人基礎力の視点も加味できたら

教科学習においては、「関心・意欲・態度」や「思考・判断・表現」などの観点で行われている育成を、「社会人基礎力」の「3つの力・12の能力要素」を意識することで、科学学習の可能性が高まることが期待されます。とりわけ、「総合的な学習の時間」「理科」などで行われている観察、実験、レポートの作成や論述、さらにそれ以外の「図工」「技術・家庭」「体育」「道徳」などでも、その方向は既に目指していると思われますし、それ以外の教科でも、「協働学習」の有効性を指摘する意見は少なくありません。本書でも、「総合的学習」や「キャリア教育」、大学での座学での取り組みなども紹介していますので、参考になると思います。

その他、特別活動（運動会・社会見学など）でも、既に「自主・自律」「思いやり・協力」などの項目で育成・評価が行われています。そこでも、「3つの力」の育成、またそれらのバランスを確認できれば、より生徒の成長に配慮した教育が可能になると考えます。

学習面と行動面を同一の視点から見られたら

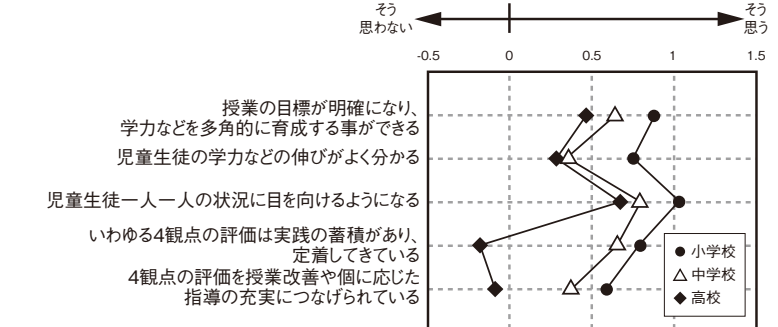
さらに、「社会人基礎力」の考え方を念頭に置くならば、学習面の「4つの観点」と行動面の「10の項目」を、同一の視点から観察し、育成の働きかけを行うこともできます。生徒の活動・学習面とそれ以外の行動を同じ視点から観察・育成していくことが、生徒一人ひとりの成長を促すために有効であることは言うまでもありません。具体的には、行動面の「自主・自律」と学習面の「関心・意欲・態度」は、いずれも「社会人基礎力」の「前に踏み出す力」につながります。また行動面の「創意工夫」と学習面の「思考・判断・表現」も互いに補い合って、「考え抜く力」と重なります。

つまり「社会人基礎力」は、「生きる力」と異なることを述べているわけではなく、「生きる力」が捉えている人間の能力を、社会人としても必要な能力として改めて見直している、と言えるのです。社会人という観点から「生きる力」を見直すなら、そこにはより将来を見越して、これらの力を高められる可能性が出てくると言えるのではないのでしょうか。

希薄傾向にある「チームで働く力」も大事

現在、高校での観点別評価や行動面への意識は、大学入試などの影響もあって、中学校ほどではないようです（次頁上図）。また、学習面での「チームで働く力」の育成・評価への意識は、「4つの観点」に明示されていないことからわかるように、低い傾向にあ

「絶対評価」や観点別学習状況の評価について、実践を踏まえ、どのように感じているか



※各項目について、それぞれ「そう思う」を+2、「まあそう思う」を+1、「あまりそう思わない」を-1、「そう思わない」を-2として回答を評点化した上で、各項目ごとに平均値（それぞれ無回答を除く回答者数に対する平均）を算出した。  
出典 日本教育新聞 平成22年4月5日

と思われる。しかし、「チームで働く力」の育成が、「考え抜く力」の育成と相反するものではないことは、本書でも紹介しています。

大学入試を意識した高校での学習の中でも、「社会人基礎力」の「3つの力・12の能力要素」をグループ学習に取り入れた活動が、むしろ効果的な場合もあります。6章で紹介した高校の総合学習やキャリア教育での取

り組み例では、その効果が述べられています。中等教育で、「社会人基礎力」の言葉を、特に教員サイドとして活用して、生徒をバランスよい成長に導いていくことは、さらなる教育の可能性を開くものになると考えます。

ています。これは、キャリア＝職業ということから、「社会人基礎力」に近い印象があります。しかし、6章で紹介した三上力氏が、「4領域8能力」は「勤労観、職業観という価値観を育むのに必要と思われる体験を子ども達が行うために必要な能力の例」と述べているように、目的が違うのです。

その能力が目的とするのは、勤労観・職業観という自分の価値観です。したがってそこでは、自分の理解や選択など、自分に関わる能力が中心です。「社会人基礎力」との比較で言えば、「主体性」との関わりが深いものとなります。「課題発見力」など他の「社会人基礎力」は、いわば「主体性」を高める活動として位置付けられる傾向にあります。

## 働くことに直結するキャリア教育は、社会人基礎力が利用しやすい

キャリア教育では、勤労観・職業観育成のために社会人と接したり、チームメイトとグループで学習したりする形が多く取られます。したがって、「キャリア発達に関わる諸能力」に「人間関係形成能力」があるように、「チームで働く力」は活動のあり方次第で、その育成のされ方が変わってくるはず。

またキャリア教育自体は、生徒達が将来働くことを目指していますから、働くための力への関心も促されます。したがって、キャリア教育で「社会人基礎力」を育てようとすることは、生徒にも学生

## 「社会人基礎力」と「キャリア発達に関わる諸能力（例）」（※）の関係

| 「キャリア発達に関わる諸能力（例）」（※） |             | 社会人基礎力でいうと                                                                                |
|-----------------------|-------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|
| 人間関係形成能力              | 自他の理解能力     | 自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切にして行動していく能力<br>主体性、傾聴力、柔軟性、状況把握力など                       |
|                       | コミュニケーション能力 | 多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力<br>主体性、働きかけ力、発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性など   |
| 情報活用能力                | 情報収集・探索能力   | 進路や職業等に関する様々な情報を収集・探索するとともに、必要な情報を選択・活用し、自己の進路や生き方を考えていく能力<br>主体性、実行力、課題発見力、計画力、創造力など     |
|                       | 職業理解能力      | 様々な体験等を通して、学校で学ぶことと社会・職業生活との関連や、今しなければならないことなどを理解していく能力<br>主体性、課題発見力、創造力など                |
| 将来設計能力                | 役割把握・認識能力   | 生活・仕事上の多様な役割や意義及びその関連等を理解し、自己の果たすべき役割等についての認識を深めていく能力<br>主体性、課題発見力、創造力、柔軟性、状況把握力など        |
|                       | 計画実行能力      | 目標とすべき将来の生き方や進路を考え、それを実現するための進路計画を立て、実際の選択行動等で実行していく能力<br>主体性、実行力、課題発見力、計画力、創造力など         |
| 意思決定能力                | 選択能力        | 様々な選択肢について比較検討したり、葛藤を克服したりして、主体的に判断し、自らにふさわしい選択・決定を行っていく能力<br>主体性、課題発見力、創造力など             |
|                       | 課題解決能力      | 意思決定に伴う責任を受け入れ、選択結果に適応するとともに、希望する進路の実現に向け、自ら課題を設定してその解決に取り組む能力<br>主体性、実行力、課題発見力、計画力、創造力など |

※国立教育政策研究所

「キャリア発達に関わる諸能力（例）」  
～小中学生、高校生の勤労観・職業観を育てるために

それは勤労観・職業観を目的とし、「主体性」との関わりが深い

初中等教育にはさらに、国立教育政策研究所が提言した「キャリア発達に関わる諸能力（例）」、いわゆる「4領域8能力」が示され

にも理解しやすいでしょう。さらに、生徒・学生自らの意志による「社会人基礎力」の発揮にもつながりやすいのではないのでしょうか。現在のキャリア教育は、非常に幅広いものになっています。必ずしも勤労観・職業観に直結するキャリアプランニング力やキャリアデザイン力を生む教育だけではなくなっています。また、6章における初中等教育での取り組みは、見方を変えれば多様なキャリア教育のあり方と捉えることもできます。

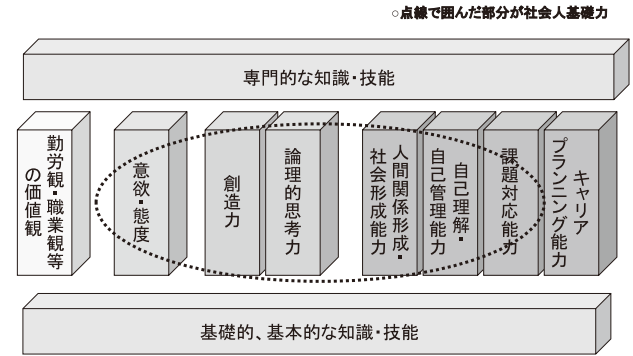
このような広い意味でのキャリア教育の中で「社会人基礎力」を意識する教育のあり方は、検討されていくべき課題と言えましよう。

## 「社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力」 ～小学校から大学まで連続したキャリア教育・職業教育を行うために

また、中央教育審議会が平成22年5月に公表した「社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力」があります。これは、全ての年齢層、特に大学までの若年世代が通う各学校において、キャリア教育、および職業教育が連続的に行えるように検討されてきた能力概念になります。領域としては、「社会人基礎力」を中心とする「職場や地域で活躍する上で必要となる力」とほぼ同じですが、「社会人基礎力」に加えて、先に紹介した小・中学校、高校で



「社会人基礎力」と「社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力」(※)の関係



※今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について  
第二次審議経過報告(平成22年5月)資料より

重視される「生きる力」「キャリア発達に関わる諸能力(例)」、1章で紹介した、大学教育の質保証として提示された「学士力(例)」がつつがっていることを示すものになっています。「社会人基礎力」の考え方では、「主体性」として意欲・態度も表れ、「考え抜く力」「課題発見力」など」として論理的思考力も表れていると言えます。さらに「社会人基礎力」を育てることで「専門知識」「基礎学力」やその他のキャリアプランニング能力なども、より効果的に高まるものと考えられます。したがって、ここでの枠組みでも「社会人基礎力」の「3つの力・12の能力要素」を意識していくことが、有効であることが示されています。そして「社会人基礎力」の育成が、社会的・職業的自立や、学びから働くことへの円滑な移行に重要であることも示していると言えます。

なお「社会人基礎力」の「前に踏み出す力」は、

「社会人基礎力」と「人間力」(※)の関係

| 人間力         |                                                                                                        | 「職場や地域社会で必要となる能力」というと |
|-------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------|
| 知的能力的要素     | 「基礎学力(主に学校教育を通じて修得される基礎的な知的能力)」、「専門的な知識・ノウハウ」を持ち、自らそれを継続的に高めしていく力。また、それらの上に応用力として構築される「論理的思考力」、「創造力」など | 専門知識、基礎学力、考え抜く力など     |
| 社会・対人関係力的要素 | 「コミュニケーションスキル」、「リーダーシップ」、「公共心」、「規範意識」や「他者を尊重し切磋琢磨しながらお互いを高め合う力」など                                      | チームで働く力、人間性・生活習慣など    |
| 自己制御的要素     | 上記の要素を十分に発揮するための「意欲」、「忍耐力」や「自分らしい生き方や成功を追求する力」など                                                       | 前に踏み出す力など             |

※内閣府「人間力戦略研究会報告書」(平成15年4月)

占めているものの、その他の専門知識・基礎学力・人間性まで力バーしています。「自己制御的要素」は、「前に踏み出す力」とほぼ同じ領域になると考えられます。また、「考え抜く力」に、基礎学力・専門知識を加えたものが、「知的能力的要素」の領域と言えます。さらに「チームで働く力」は、「社会・対人関係力的要素」に近いですが、公共心など「人間性・基本的な

生活習慣」にも関わります。

※(1) 人間力戦略、(2) 技術力戦略、(3) 経営力戦略、(4) 産業発掘戦略、(5) 地域力戦略、(6) グローバル戦略

「キーコンピテンシー」(経済協力開発機構(OECD))  
国際社会が持続可能なものとして発展を遂げていくために

基本的資質・力としての「意欲・態度」、およびキャリア教育として育成すべきとする「自己理解・自己管理能力」を力バーします。「考え抜く力」は、基本的資質・力として、収束的思考とされる「論理的思考力」と拡散的思考とされる「創造力」(心理学者ギルフォードによる)とキャリア教育として育成すべきとする「課題対応能力」を力バーします。

また、「チームで働く力」は「人間関係形成・社会形成能力」を力バーしますが、「社会人基礎力」では「チーム」という側面が強調されています。

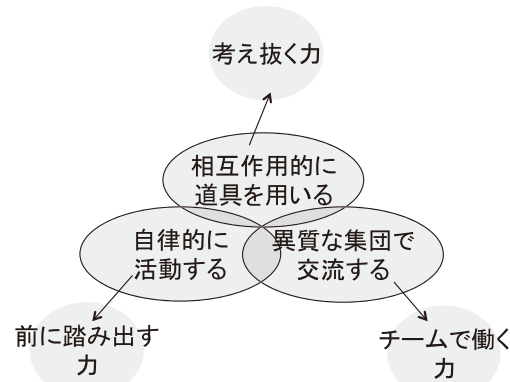
なお、これらについては、1章の「社会人基礎力」はどのように構成されているかの説明と、合わせてお読みください。

「人間力」(人間力戦略研究会)  
社会的視野も含めて人間の育成を考えるきっかけになった

ところで現在、我が国として教育および人材育成を大きく重視しているこうした一つの背景に、平成14年に経済財政諮問会議が提出した「6つの戦略」(※)で、その筆頭に人間力戦略を挙げたことも関係しています(1章「社会人基礎力とは」P5参照)。それを受けて、翌平成15年に定められたのが「人間力」です。

「人間力」は、次頁上図にあるように、「社会人基礎力」が多くを

「社会人基礎力」と「キーコンピテンシー」(※)の関係



※OECD(経済協力開発機構)

日本では既に「生きる力」として教育目標を定める動きはありましたが、その後、世界的にも教育目標としての能力を定めようとする動きが出てきました。その中で、経済協力開発機構(OECD)は、世界的な教育のレベルを上げるために、世界共通の生徒の学習

到達度調査(PISA)の実施と並行して、教育目標ともなる知識や技能を超える能力群である「キーコンピテンシー」(※)を定めたのです(平成15年公表)。ここで定めている3つの力は、まさに「社会人基礎力」の「3つの力」と符号するものとなっています。

※「コンピテンシー」とは成果につながる能力の意味

このように、いずれの能力観の中でも「社会人基礎力」は中核に位置付けられます。言い換えれば、どのような教育においても、今まさに「社会人基礎力」の育成が求められるときが来ていると言えます。